

平成28年度「家活グランプリ」
入選作品 事例集

【審査講評】

「家活グランプリ」は、『家の光』『地上』『ちやぐりん』を活用した、JAグループ職員の日ごろの努力に焦点を当て、小さな草の根的な活動を表彰するため、平成二十八年度、新たに創設された。応募された作品は、一つ一つが輝きを放ち、どれもすばらしいものであった。とくに、入選した作品は、一人の、あるいは少人数の小さな努力が、JA職員の連携強化、さらには地域とのつながり強化へと、まるでつぼみが大輪の花を咲かせるように、大きな輪（活動）へと広がっているさまが描かれていた。それぞれの活動に優劣をつけることはできないが、JA・地域の活性化に大きく寄与した成果が入選の決め手となった。

平成二十九年五月

審査委員長 東京農業大学 教授

上岡 美保

最優秀賞

あなたのお役に立ちたいくごようきき隊 家活発信中く

J Aあまくさ 大矢野統括支所 松本 たまき | 4

優秀賞

はばたけ！『家の光』とともに

J Aぎふ 本店 棚橋 美枝 | 7

エコ活動への歩み

J A南さつま 川辺支所 中藪 みつ子 | 11

佳作

あつぎと家活く一心同体の家の光く

J Aあつぎ 本所 大貫 あゆ美 | 15

すぐ活、また活

く届いたら、すぐ活用。行き詰まったら、また活用！く

J Aたじま 本店 坂田 陽子 | 18

私たちの家活

J Aしまね 出雲地区本部 岡野 広美 | 21

あなたのお役に立ちたいくごようきき隊 家活発信中く

J Aあまくさ 大矢野統括支所 松本 たまき

みなさんの暮らしの困りごとはなんですか？ わたしたちは、あなたのお役に立ちたいくご用をききたいく「J Aごようきき隊」です。J Aあまくさ御用聞き活動の一環として、職員三人で自主的に立ち上げました。発足のきっかけは、生活指導員として地域の方と接するさい、支所の統廃合でJ Aとのつながりが希薄になっていることを感じていたからです。そこで、いつも前向きに仕事に取り組んでいるL A（ライフアドバイザー）の藤本と須崎に相談しました。「J Aとしてわたしたちになんかできんかなあ」。L Aの二人も、利用者を訪問するさいに親近感を持ってもらえない、と同じ気持ちでした。身近にあるJ Aだからこそ、もつと地域の役に立ちたい。しかし何をすればいいのか。『家の光』の「ふれあいJ A広場」や、「J A発 元気な地域づくり」などを参考に、三人で考えました。他J Aの活動をヒントに、私たちは地元にあるJ Aデイサービス「だんだん」を知ることから始めようと、『家の光』の紹介というかたちで、交流会をスタートしました。まずは「5分でもいいき楽しいゲーム」を、J A職員と利用者でいっしょに楽しみました。大笑いすることで距離がぐんと縮まり、まるで自分の孫のように話をしてくれます。このことから地元で働ける喜びと、もつと地域の方の役に立ちたいという思いが増しました。また、新型詐欺についても、二〇一六年七月号の記事を活用した寸劇で紹介しました。詐欺を防ぐ四か条を拡大コピーし、全員で唱和しました。今では月一回定着した活動になり、新ネタを『家の光』から見つけています。ときには女性部員も寸劇やゲームに参加して利用者との交流を深め、J Aを身近に感じてもらえるようになりました。交流会の中で、年金獲得キャンペーンなども自然と紹介するこ

とができ、数件JAへの変更をしていただきました。

「だんだん」での活動に手ごたえを感じていたところ、『家の光』二〇一六年十月号に、「わたしノート」（エンディングノート）の記事がありました。わたしは生活指導員の前は信用窓口担当をしていて、相続・次世代対策を課題としていました。相続相談会など開催していましたが、だいたいな問題とわかってはいても、ニーズが少なかったり、反応が薄かったりする、組合員の様子に、なすべがなく悩んでいました。「わたしノート」の記事を読みると、これなら組合員にも、すんなり受け入れられると感じました。たまたま来店された組合員に『家の光』を見せたところ、地区の集まりに呼んでいただくことになりました。どのようなにしたらわかりやすく伝わるか、堅苦しい一方的な話で終わらないようにとメンバーで考えました。

そこでまず、記事の漫画を紙芝居にアレンジしました。練習を重ねていくうちに、登場人物名を参加者の名前にすることで、親しみを持ってもらえるのでは、とアイデアが出ました。当日は、ゲームで盛り上がり、リラックスしてもらってから、終活の紙芝居をしました。登場人物名を参加者の名前にしたのは、思惑どおり爆笑を誘いました。最初は終活という言葉に戸惑いが見られましたが、しだいに「わたしノート」の必要性への理解と、終活への関心を持ってもらえました。その後に貯金や共済を見直して確認したいとの相談もJAへ寄せられました。なかでももつとも感謝された出来事がありました。

『家の光』を紹介したさい、雑談のなかで「四月に起こった熊本地震で家にひび割れができたが、そのままにしている。JAの建物更生共済はどんなときに該当するのか」となげなく尋ねられました。LAの藤本と須崎が後日対応すると、共済金の支払い対象になる箇所が数件ありました。「活動に参加しなければこのような話はできなかった」「JAはよかばい！」と言ってもらえ、その方々

とおたがいに喜び合いました。まさに、わたしたちの「JAごようきき隊」の活動が実を結んだとメンバー一同喜びをかみしめました。同時に、この活動をもっと広げたいと思いました。

わたしが事務局を務める女性部を対象に、終活セミナーを開催しました。前回と同様、ゲームと紙芝居で大盛況でした。女性部員の多くが「わたしノート」を記入しました。さらに、各地区の女性部の支部、老人会などにも呼ばれるようになり、『家の光』の記事を紹介しています。また、「年金友の会」を対象に、金融部と連携して終活セミナーの開催にもつなげました。このことで、縦割り組織となりつつあった大矢野統括支所は、部署を越えた職員の連携強化ができたほか、総合事業の強みを職員が再確認できました。まだまだ始まったばかりです。これからも職員の連携をさらに深くし、『家の光』をツールとして、地域へ飛び込んでいきたいと思えます。

【選評】

JAあまくさの職員三人で「JAごようきき隊」設立。支所統廃合で組合員とJAとのつながりが希薄になるなかで、デイサービス利用者との交流から始め、ゲーム、寸劇、「わたしノート」、紙芝居などで工夫を凝らし、しだいに利用者との信頼関係を構築した。こうした活動が評判となり、女性部、老人会からも呼ばれるようになった。また、部署を越える職員の連携強化による、活動のさらなるパワーアップで、地域貢献にも尽力している。審査委員全員一致での最優秀賞となった。

はばだけ！『家の光』とともに

J Aぎふ 本店 棚橋 美枝

『家の光』は届くけれど、読んでいるのは母とおばあちゃん。わたしが読んでいたのはマンガのページ。恥ずかしい話ですが、これまではそうでした。

そんなわたしが女性部担当になると、状況は一変。『家の光』の普及運動をするのに、まさか読んでいないとは言えません。でもそれがきっかけとなり、『家の光』をしつかり読むようになりました。

購読推進をするには、自分が中身を理解していないと話になりません。いいところを伝えることもできません。

本店の担当課に配属されたのは今から十五年前。『家の光』を読むようになってから、かれこれ三十年以上になるわけです。お付き合いも長くなりました。

『家の光』には、旬の野菜を使った料理や、家庭で手軽にできるメニューがたくさんあります。料理が好きなので、いいと思う記事は、切り抜いたり、本をバラバラにしてファイリングしています。気がつくともう、ファイルは十冊にもなりました。支店の女性部担当者や利用者から、梅干しの作り方や、簡単な料理などの問い合わせが入ると、ファイルから記事をパッと取り出して紹介できるので、とても役立っています。おかげさまで、だいぶ頭にも入っています。「野菜ソムリエ」に挑戦するきっかけももらいました。

ファイリングしているのは料理の記事だけではありません。「60分でできるやさしいハンドメイド」や、しめ縄のワラの保存方法など、内容によってファイルを分けています。女性部員や『家の光』担当者との会話のなかで「あのときに載った記事を使ってみるといいよ」「これなら支店の二階でできるよ」などと、提案できるようになりました。

今までファイリングしたなかで、一番多く活用している記事は、二〇〇六年二月号の「緑の便利帳 イモからつくるほかほかこんにやく」。もともと加工に興味があったので、ケチャップやみそなどは自分で作っていました。しかし、こんにやくが家で作れるとは、思ってもみませんでした。

コンニャクイモの栽培には三年かかるとのことでしたが、環境が良かったのか、二年で収穫できました。栽培の先生は、もちろん『家の光』。イモからこんにやくにする作り方も『家の光』に教えてもらいました。自分で作ったこんにやくは、市販のものとは違い、ぷるっぷるっの食感。こんにやくのイメージが変わりました。一つのイモから結構な量が作れるので、近所にもおすそ分けしたところ、たいへん喜んでもらえました。

当時、はあとセレブ（フレッシュユミズ）でいっしょに活動していた友だちにも、この「美枝こん」を差し入れたところ、おいしさのとりこになり、なんと、彼女も栽培から取り組みはじめました。母が加入している女性部からも、「支部活動でこんにやくづくりをしたいでイモわけてくれない？」と連絡があり、コンニャクイモといっしょに『家の光』記事を渡しました。こんな風に少しずつ、こんにやくの輪がひろまっていきました。こんにやく作りや米粉レシピを活用した活動がきっかけで、今まで女性部がなかった支部に、新設されたところもあります。

J Aぎふの女性部の活動の基本は、小さなグループ活動です。小さなグループが集まって大きな活動につながっていくと考え、グループが一つでも増えるよう働きかけをしています。活動では『家の光』を活用し「家の光小グループ」として登録。グループが年間五回以上活動して報告書を提出することで、J Aから活動助成を出す制度を取り入れました。活動回数に満たないグループにたいしては、回数としてカウントできる、「家の光小グループ」向けの料理教室「家

の光Cooking」を提案しています。料理教室の先生は、もちろん『家の光』。レシピと材料を本部で準備し、会場を提供するだけで、会員さんたちが自分たちで進める形で人気となっています。

『家の光』を使った料理教室に「男の料理」もあります。このように、いろんな場で『家の光』を紹介・活用することで、利用者にも『家の光』の良さがわかってもらえるのではないかと思います。そのためには、みずから活用することがたいせつだと実感しています。

とは言え、わたしも担当部署に配属されるまでは、あまり『家の光』を読んだことはありませんでした。きっと職員の中にも読んでいない人がたくさんいると思います。まずどうしたら職員が読んでくれるようになるか？ 会議の中でもときおり、『家の光』記事を使うようにしていますが、どこまでわたしたちの思いが伝わっているかわかりません。

そこで、JAぎふの職員向けの内報誌「六風」に、おススメの記事を紹介するコーナーをいれてもらうよう提案し、二〇一六年十二月から職員によるリレー方式で記事紹介をすることにしました。担当職員に限らず、役席でも一般職員でも、回ってきたら記事を書きます。この取り組みは、始めたばかりですが、これがきっかけとなり、少しでも『家の光』に関心を持って活用してもらえたら、また利用者との会話のなかでも役立ててもらえたらと願っています。

【選評】

購読推進のためには、まず、中身を理解することが重要。担当課配属から五年、『家の光』愛読三十年。チェックした料理やハンドメイドなどの記事を集めたファイルは十冊に。質問されればすぐにマイファイルから紹介。女性部員や担当者との会話のなかで、良い提案が可能となった。こうした日々の活動は、

「野菜ソムリエ」の資格取得という自身を成長させる契機となった。コンニャクイモ栽培から始まったこんにやく作りは、活動の輪がどんどん広がり、他支部の女性部立ち上げのきっかけにもなった。みずからの地道な活用から、小さなグループ活動へ、そしてさらに大きな活動の輪へと広がっている点が評価のポイントとなった。

エコ活動への歩み

J A南さつま 川辺支所 中菌 みつ子

わたしは生活指導員に着任して八年目になります。女性部員のみなさんと生活指導員の仲間に助けられながら、日々忙しく職務をこなしております。着任時は、料理はするけれど栄養士のような専門知識はなく、J A教育文化活動の展開は、とても難しいことのように感じられました。厚い壁がわたしの前に立ちほだかり、不安と自信のなさで、研修に参加しても戸惑うばかりでした。

「教育文化活動」ってどうやるんだろう。家の光協会主催の研修に参加したとき、「研修なのになぜみんな、笑って生き生きしているの？」と感じたことが、今でも鮮明に記憶にあります。わたしたちが担っている仕事は、J Aファン作りだけではなく、組合員、女性部員、地域住民が、生活に必要な知識、技能を身につけ、満足して暮らせる（笑って暮らせる）地域社会作りにつながるのだと、このとき理解しました。

生活指導員初年度の、女性部「班長研修」の計画を立てたさい、「地球温暖化」に着目し、エコ活動に取り組みたいとの役員の希望があり「鹿児島環境未来館」の施設を見学しました。わたしたち一人一人が楽しく環境保全活動に参加し、環境に配慮した生活や行動に踏み出すきっかけになりました。

次年度は環境についての意識を高め、部員みずから「気づき」「知り」「学び」「実行する」ことを踏まえた活動を計画しました。

まずは行政と協力し、公共施設で「緑のカーテン」に取り組む体制作り。そして、わたしたちの取り組みとして、地域の方と一体となった研修を計画しま

した。この研修を終えてから、「支所ふれあい活動」の一環として、「エコプロジェクト」を立ち上げ、女性部員、フレミズ会員、青年部員、職員が一体となって活動を始めました。支所を拠点とした活動は、地域の活性化につながるだろうと思います。

「エコプロジェクト」としての始めの活動は、JAの施設へのグリーンカーテン設置でした。棚作りは若い職員、苗の植えつけはJA営農指導員、とみんなで協力。やがて、フレミズ会員、青年部員と、収穫したゴーヤで料理講習を開催しました。

こうした活動は県女性協でも実施され、わたしたちJA女性組織全体でも取り組み強化を図りました。川辺支所女性部の総会のさい、「家の光記事活用グループ」で、二〇十六年四月号の読書会を行いました。このとき「ヘチマエコ活動」の記事が目に入ってきました。参加者三十五人が一致団結し、ゴーヤの経験を生かして「ヘチマエコ大作戦」を立ち上げました。早速、会員にヘチマの種を配り、苗ができたら地域の方にも提供し、ネットワークを広げていきました。

この記事のおかげで、わたしはわくわくしながら「年間ヘチマのエコ活動計画書」を作成することができました。前回の「ゴーヤのエコ活動」の教訓から、ヘチマの栽培は各女性部会員の家庭で行い、おたがい情報交換をしながらすすめることにしました。それからは、苗の育成状況の報告や、次の活動に向けての準備など、自主的に会員が出入りするようになり、事務所は駆け込み寺のようになりました。

鹿児島県では昔からヘチマを食べる習慣があり、「家の光講師」にレシピを考案していただいて、ヘチマを使った料理教室を開催しました。若い方はヘチマの食べ方を知らないなので、レシピはフレミズ会員にたいへん喜ばれました。こ

の様子がJA広報誌で掲載され、へちま生産者の方から、へちま料理の普及活動への感謝の言葉をいただきました。次は記事を参考にしして一升瓶にへちま水を取り、若い人向けにアロマオイルを調査しました。使ってみると香りでリラックス効果があり、肌がしっとりしたと感想を述べる会員もいました。

また記事に載っていたへちまたわし作りにも挑戦してみました。「たわしを使った小物作りはできないだろうか」とみんなで話し合いをしたとき、鍋敷きや、夏の農作業には欠かせない帽子や、背中に背負う蓑は軽くて丈夫だと、懐かしく心を弾ませ、部員たちは昔を思い出しながら、無心で作業をはじめました。作品ができあがると、昔の生活の様子が思い出され、わたしも知らない苦労話に涙が出ました。

『家の光』を使った学習は、だれしもの人生のためになることはまちがいありません。一人でも多くの購読者が、仕掛け人であるわたしたち生活指導員と同じ経験や喜びや満足を得られるよう、今まで以上に記事活用を積極的にすすめていきます。そして、職員にはJA教育雑誌として認識してもらおうとともに、組合員向けの学習資料としての利用啓発、役職員一体となって普及運動に取り組めば、組織拡大につながると信じています。

【選評】

JAファン作りだけでなく、組合員、女性部員、地域住民が、知識・技能を身に付け、笑って暮らせる地域社会作りに貢献したい思いで、まずは地球温暖化に着目。支所ふれあい活動の一環で、女性部員、フレミズ会員、青年部、職員が一体となった「エコプロジェクト」を開始。JAの施設にゴーヤのグリーンカーテンを作ることから始まり、地域にゆかりのへちまのグリーンカーテンへ。こうした活動で、事務所は会員の駆け込み寺的存在に。さらに収穫したへちまは地域の伝統料理復活、アロマオイル、へちमतわし、帽子、蓑作りと活

用の幅を広げ、同時に、世代を超えた交流へと広がり、多面的な効果を発揮した点が評価された。

あつぎと家活〜一心同体の家の光〜

J Aあつぎ 本所 大貫 あゆ美

J Aあつぎの『家の光』活用の取り組みについてご紹介いたします。J Aあつぎでは、職員全員が『家の光』を購読しており、職員会議のあと、かならず「家の光の時間」を設けています。職員会議担当者が、紹介したい記事を全員と共有することで、普及推進や訪問時の話題づくりに役立てています。

また、女性部のあいだでも『家の光』は盛んに活用されています。J Aあつぎ女性部で、毎年白熱する「健康まつり」では、数ある競技のなかに「ウルトラクイズ」があります。この競技は毎年『家の光』十月号の記事から出題されるクイズを○×形式で答え、勝ち残ると豪華な景品がもらえるというものです。クイズを楽しみに『家の光』を開き、深く読みすすめてもらう目的で考案されました。健康まつりの恒例競技として、部員のみなさんにたいへん好評です。

「農業まつり」では、手芸の作品展示コーナーを設けていて、『家の光』の記事を参考にした作品が数多く並びます。昨年度は、二〇十二年二月号の「お福分け鶴」体験コーナーを設け、幅広い年代の方にお越しいただきました。体験コーナーのそばに置いてあった見本誌を手に取り「こんなにたくさん旬のレシピが載っているのね」「手芸も手軽にできて、もつといろんな物に挑戦したいわ」と、女性部へ加入していただいた事例もあり、『家の光』から女性部へとつながりが波及していることを実感しました。

そのほかにも、地域住民の方に『家の光』のすばらしさを広めるため、毎月「家の光倶楽部」を開催しています。『家の光』の記事を使った料理・手芸講習会を行い、使用した記事や「家の光図書」の紹介もしています。そのおかげで、

その場で『家の光』を購入してくださる方も増えてきており、なかには、ためになると年間購読の予約をしてくださる方もいらっしゃいます。

大きなイベント以外にも、いろいろなところで多様な記事活用が行われています。JAあつぎ南毛利支所では、女性部員が手芸作品を支所の窓口に展示し、女性部活動のPRを行いました。すると、窓口に来店された組合員から「支所が明るくなった」「女性部の活動を知るきっかけになった」など、大きな反響があり、部員増員運動に取り組み始めてから六年間で二十二名と、大幅な増員につながりました。現在はこの取り組みが各支所へ広まり、女性部の活動紹介の一部として、手芸作品が展示されています。

また、JAあつぎでは三支所で「集い処」という組合員のお茶飲みスペースを設置しており、女性部員の方が『家の光』を各自持ち寄り、お茶を飲みながら、交流を深める会が自主的に行われています。

次世代の方にたいしては、四十九歳までの女性組合員対象の通年型講座、女性大学「夢未スクール」で、毎回『家の光』を配布しています。記事紹介はもちろんのこと、講座内容にも『家の光』からレシピや手芸を取り入れて活用しています。

わたしが事務局を務める女性部協議会でも、視察研修旅行のバス車中で「家の光クイズ」を行っています。おたがいの親睦を深めるきっかけ作りとして、とても効果的です。定期的に行われる役員会議のなかでも、『家の光』に載っているヨガや体操を取り入れ、気分転換に活用したり、簡単なお菓子を作って役員に食べてもらい、レシピを紹介しています。会話のなかに盛り込むことで、『家の光』の存在をより身近に感じてもらいやすくなります。

このような取り組みの結果、平成二十二年に女性部協議会OGからボランティアグループ「ゆめみ隊」が発足しました。家の光協会主催の「食農教育紙芝

居コンクール」に出品するため、「ありがと、とん吉」「すごいぞダイズレンジャー」などの食農教育紙芝居を作成しました。現在は子育て支援や、小学校などで活動し、子どもに食と農のたいせつさを伝えていきます。

同じく昨年、女性部協議会のOGから、「サザエ会」というグループが誕生しました。『家の光』に掲載されているレシピを参考にして、JAあつぎらしいオリジナルレシピを作成しています。現在は、JAあつぎで販売している「厚木産蒸し大豆」のレシピも考案しており、JAあつぎファーマーズマーケット「夢未市」に、「サザエ会」のオリジナルレシピを掲示しています。

自分たちの学んだ知識を地域の方へ発信するというかたちで、『家の光』をきっかけにJA事業に参画しています。

JAあつぎでは『家の光』の購読部数が千五〇〇部を超え、平成二十二年度より、教育文化活動を基軸とした活動を展開してきました。これからは、組合員や地域の方へ広まってきた『家の光』を、地域全体のテキストとして幅広く活用し、組織の強化や、次世代対策、組合員のJA事業へのさらなる参画・基盤拡大へとつなげていきたいと考えています。

【選評】

職員全員が『家の光』を購読。会議のあとの「家の光の時間」には担当者がおすすめ記事を紹介。情報共有で普及推進、訪問時の話題作りに。「健康まつり」では「ウルトラクイズ」、「農業まつり」では手芸展示を通じて、『家の光』の活用をPRすることで女性部加入の増加に。地域住民へは「家の光倶楽部」の開催で購読増加につながっている。各支所の小さなつながり、「集い処」でお茶を飲みながらの交流会。こうした積み重ねによって、女性部協議会OGから地域のボランティアグループが発足。学んだ知識を地域へ発信している。本所・支所を拠点とした大小の活動の効果が地域へと波及している点が評価された。

すぐ活、また活

く届いたら、すぐ活用。行き詰まったら、また活用！く

JAたじま 本店 坂田 陽子

『家の光』『地上』『ちゃぐりん』はアイデアの宝庫。わたしたち職員による記事活用は、組合員のみなさんが実践する記事活用とは、少し視点が違います。

すぐ活用編

①手芸ページは欠かさずチェック

趣味としての手芸ではなく、実用性を重視して手芸ページをチェック。気になるものがあれば実際に作ってみて、組合員・職員の前でさりげなくPRしながら使います。「それいいね」、「作ってみたい」の声を期待して、「見て、これ『家の光』に載っていたの」と話しかけています。また、各支店の担当者を対象に、記事活用例として手芸講座を開くこともあります。

②管内の記事はPRのチャンス

JAたじま管内の記事が掲載されるときは、独自でポスターを作成。支店・センターなどで掲示して、身近な話題が載る雑誌としてPRしています。もちろん広報誌でも紹介します。当然のことですが、毎月の読みどころは店頭で掲示。そのまま掲示するのではなく、切り取って、該当のページに貼って、立体的に読みどころをおすすめています。

③JAを知らない若い世代へは『ちゃぐりん』を

子育て奮闘中のママを対象に開催している「ママ友セミナー」の参加者は、JAとのつながりが少ない方ばかり。言い換えれば、セミナーはJAを知っ

てもらおう絶好の機会です。ママさんたちの物事を決める基準はやっぱり子ども。『ちやぐりん』を紹介すると、「へえ、こんなのあるんだ」と興味を持ってくれます。

④ 組合員との会話のきっかけに

『家の光』は、広報誌といっしょに職員が毎月八日の一斉訪問日にお届けしています。お届けのさいには、「今月の表紙は、この方ですよ」「こんな記事が載っています」のひと言がたいせつ。『家の光』のおかげで、組合員との距離がぐっと縮まります。

また活用編

日常の業務でアイデアに行き詰ったら、『家の光』を読み返します。眠っていた、たくさんの使えるネタに気づきます。ファッション誌やエンタメ雑誌は、発行から日がたつほどに、中身の価値が薄れますが、『家の光』は繰り返し読める・活用できるのが最大のポイントではないでしょうか。

① 料理・手芸は古くならない

組合員、女性会員、地域住民を対象に開く料理や手芸の講習会のネタ探しには、やっぱり『家の光』。料理のレシピ、手芸作品の作り方は、何年たっても現役です。今年度は、バスボム作りがはやりのようでした。

② 婚活事業の心の支え

『地上』掲載の「今日から使える婚活テク！」は、未婚男女の気持ちや考えを学べる教科書です。JAたじまではこれまで婚活イベントを二回開催。まだまだ手さぐりの状態です。婚活イベントの事前セミナーでは、参加者へのアドバイスに重宝しますし、参加者からの疑問・質問に応えるのにひじょうに役に立っています。掲載内容は婚活参加者の「あるある」ばかりです。

③デザイン・レイアウトを参考に

広報誌作りで頭を悩ませるのが、デザイン・レイアウト。マンネリにならず、読者に読んでもらえるよう心がけています。コーナーの中身に合わせて、『家の光』『地上』『ちやぐりん』を参考に写真の構図、誌面の見せ方、内容を考えています。

【選評】

「わたしたちの記事活動は少し視点が違う」から始まったこの作品。実用性を重視した手芸の試作、それを組合員・職員にさりげなくPRしながら使用。「それいいね」から手芸講座へ。JAたじま管内の記事が掲載されると、独自のポスター作成でPR。支店・センターでの身近な話題のきっかけとなっている。組合員以外の若い層へは『ちやぐりん』を活用した子育てに役立つセミナーで、JAを知ってもらおうきっかけに。『地上』を活用した婚活イベントも実施。JA職員としての三誌の効果的な活用で、JA、組合員、地域の活動の活性化を図っているところが評価された。

私たちの家活

J Aしまね 出雲地区本部 岡野 広美

ちょうど一年前、わたしは定期人事異動により、ふれあい福祉課へ配属となりました。ふれあい福祉課は、江角課長を筆頭に、十人の課。組織活動をはじめ、介護予防・食農教育・組合員健康診断・イベントの企画・実施・地域貢献活動など、幅広い分野の仕事をそれぞれが担当し、忙しい毎日を送っています。

そんななか、女性部組織の事務局となったわたしと、ワッキーこと脇坂職員。彼女もわたしより三か月前に入組したばかりの新人さん。右も左も分からない二人が毎日「ああでもない」「こうでもない」と言いながら、過去の資料を引っぱりだし女性部活動に取り組んでいます。

「J Aしまね出雲女性部」は三十六支部を五つのブロックに編成し、統括しています。各ブロックにはブロック生活指導員（専任）が配置され、支店の生活指導係（兼任）と連携し『家の光』を基軸とした教育文化活動に取り組んでいます。

J Aしまね出雲地区本部では女性部グループの多様化・自主的運営・活性化を目的に「J Aしまね出雲女性部優良活動グループ表彰制度」を十年以上前から設置しています。この表彰制度は、女性部活動には欠かせない、核となる活動を主体とした「仲間づくり」「食と農」「環境保全」の三部門を対象とし、各支部で取り組んでいるグループ活動に対し『家の光』をどう活用しているかをはじめ、取り組み回数や活動成果、J A事業への貢献度、自主性などの審査基準を設けています。

「仲間づくり部門」「食と農をつなぐ活動部門」はそれぞれ最優秀賞一グループ、優秀賞二グループを表彰し、「環境保全活動部門」においては、生活購買店舗「ラピタ」でのレジ袋無料配布廃止にともなう基金を活用し「ラピタ環境活動支援賞」として優秀な五グループを表彰します。

出雲女性部には多数のグループ活動があり、毎年この表彰制度にたくさんのお応募が寄せられます。平成二十六年より「家の光の活用」を表彰基準に取り入れたことで、応募総数の低迷が考えられたため、家の光協会の協力により「家の光活用術研修会」を開催し、「家の光活用グループ」の育成にも取り組みました。その結果、前年度を上回る八十を超えるグループのお応募があり、さらに今年度は約九十グループのお応募がありました。

ここからたいへんなのが審査会の準備。家の光協会中国四国普及文化局局長をはじめ、六名の審査員をお招きし、厳正なる審査を行います。限られた時間内で、約九十ある応募から、十一の優秀なグループを選ぶので、応募用紙をもとに、活動内容・PRポイントを正確にとらえ、審査員のみなさんに的確に伝わるよう資料を作ります。パソコンが得意なワッキーが頭を悩ませながら二週間かけて仕上げてくれた資料。ただ：とどころ文章がおかしい：。それをわたしがチェック！ そうこうしながら、平成二十八年度も二月九日に審査会を開催することができました。

平成二十八年度「仲間づくり部門」において、最優秀賞を獲得したのは、高浜支部女性部のみなさん。『ちやくりん』を活用し、エコ活動でもある廃食油の親子キャンドル作りや、ペットボトルに色・柄をつけたあんどん作りもおこなわれました。活動はこれだけでは終わりません。今度は中秋の名月にあわせて「お月見会」を企画。親子で作ったあんどんにキャンドルの灯りを点し、秋の風情を楽しみました。このお月見会には地元の有志・支店職員も協力して多くの仲

間で企画立案。芋煮や月見団子の屋台ができ、参加者全員で「炭坑節」たんこうぶしを踊るなど、会場には約百名が集い、楽しい仲間づくりができました。女性部員だけでなく、親子・家族・地域の方を交えた活動の展開。地域の活性化・女性部活動の見える化にもつながる活動は満場一致で最優秀賞に選ばれました。

こうして選ばれた優秀グループを、出雲女性部員約六百名が集う「JAしまね出雲女性部まつり・家の光大会」において表彰します。大きな舞台の上で誇らしげに賞状を受け取るグループの代表のみなさん。表彰式を見た他支部の部員は「来年はわたしたちも」と意気込みます。また、会場に表彰グループの活動の様子を展示することによって「こーならわたしたちでもできーがね!」「もつとこげすればいいがね」と、気づきや想像の翼が広がり、活動は年々ステップアップしていきます。来年度も各支部切磋琢磨し、「家活」ひいては教育文化活動に取り組んでいただけることと思います。

ふれあい福祉課で一年を経過した今、わたしたちにももっとなにかできるのではないか、なにを実践していこう、とわくわくしながら考えていた矢先に突如のワッキーの異動発令。わたしもワッキーも困惑してしまいました。それでも今、ワッキーは「ふれあい福祉課で学んだ事を生かして、一歩先を行くプロジェクト生活指導員になる!」と意気込んでいます。わたしも負けてはいられません。二人の立場は違うけれど、やることは同じ! 「家活」でさらなる女性部活動のパワーアップをめざします。二人の「家活」は始まったばかりです。

【選評】

女性部組織の事務局となった二人の職員。試行錯誤しながら三十六支部五プロジェクトの女性部の教育文化活動を支えている。女性部活動の「仲間づくり」「食と農」「環境保全」三部門の活動グループ表彰審査会のさいには、約九十グループ

もの応募にたいし、各グループ活動の真意が伝わるよう資料作りに邁進。活動が地域の活性化・女性部活動の見える化をサポート。表彰式では、他支部のグループが自分たちもさらにながらんと意気込み、女性部活動は年々ステップアップ。「職員としてなにながらできるか？」と常にわくわくしながら女性部活動を支えている姿が評価された。

※原稿については「家の光用事用語集」に基づき、補足等させていただきます。